

興戸遺跡発掘調査概報

— 郡塚地区の調査 —

(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第10集)



1989

田辺町教育委員会

序

近年、田辺町においても各地域で大小さまざまな開発が進み、そのことにより遺跡の調査も増加してきました。このような調査は、田辺町の歴史をひもとく大きな手がかりであり、また多くの成果を得ることができます。

本町には、史跡大住車塚古墳をはじめ数多くの遺跡がありますが、町としては、主要な遺跡の範囲などを確認し、開発に際し資料の提示をし、適切な指導助言ができるようしておくこと、また、町民のみなさんの文化財に対する関心を高めてもらうことも文化財保護の上から大事なことと考えます。

今回の調査は、特に開発の進む町中央部にある主要な遺跡のひとつである興戸遺跡の確認調査であり、ここにその概要を報告するものです。

また、本町では今年度より史跡大住車塚古墳の仮整備に着手しました。数年先には、緑豊かな公園となって、みなさんにより一層親しんでもらえることと思います。

最後になりましたが、調査にあたって、土地所有者の方をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことを厚くお礼申しあげます。

平成元年3月

田辺町教育委員会

教育長　吉　山　勝　平

例　　言

1. 本書は、田辺町教育委員会が京都府綴喜郡田辺町大字興戸小字郡塚36番地・同38番地において行った興戸遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は昭和62年度国庫補助事業として実施したが、調査期間等により昭和63年度に単費で報告書を作成した。
3. 現地調査は昭和63年2月19日に開始し3月29日に終了した。
4. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体……田辺町教育委員会

調査責任者……田辺町教育委員会 教育長 吉山勝平

調査指導……京都府教育庁指導部文化財保護課

調査担当者……田辺町教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎

調査参加者……岡嶋重夫・西川富士夫・岡山 努・青代 智・吉田慎太郎・北村
太・堀井真樹・高城勝広・山田 崇・奥西幸喜・奥西賢哉・佐藤正
之・井上直樹・鎌田敏史・大谷健二・藤本忠嗣・斎藤和久・武田頼
子・河合保典・有田艶子・平田和美

調査事務局……田辺町教育委員会 社会教育課（課長（当時）加藤晴男）
(課長 古川 章)

5. 調査に際しては、調査地の所有者北尾浩一・真敏氏に多大なるご協力をいたしました。深く感謝します。
6. 調査中および本書作成にあたり次の諸氏から有益な指導・助言を得た。記して感謝の意とします。（敬称略・順不同）
小野忠熙・金村允人・高橋美久二・伊賀高弘・石井清司・伊野近富・戸原和人・
村川俊明
7. 本書の執筆・編集は鷹野が行った。

目　　次

1. はじめ	1
2. 位置と過去の調査	2
3. 調査経過	3
4. 検出遺構	4
5. 出土遺物	8
6. まとめ	11

1 はじめに

こうど
興戸遺跡は、京都府綴喜郡田辺町大字田辺から大字興戸にかけて位置する、南北約750m・東西約250mの遺物散布地として知られている。

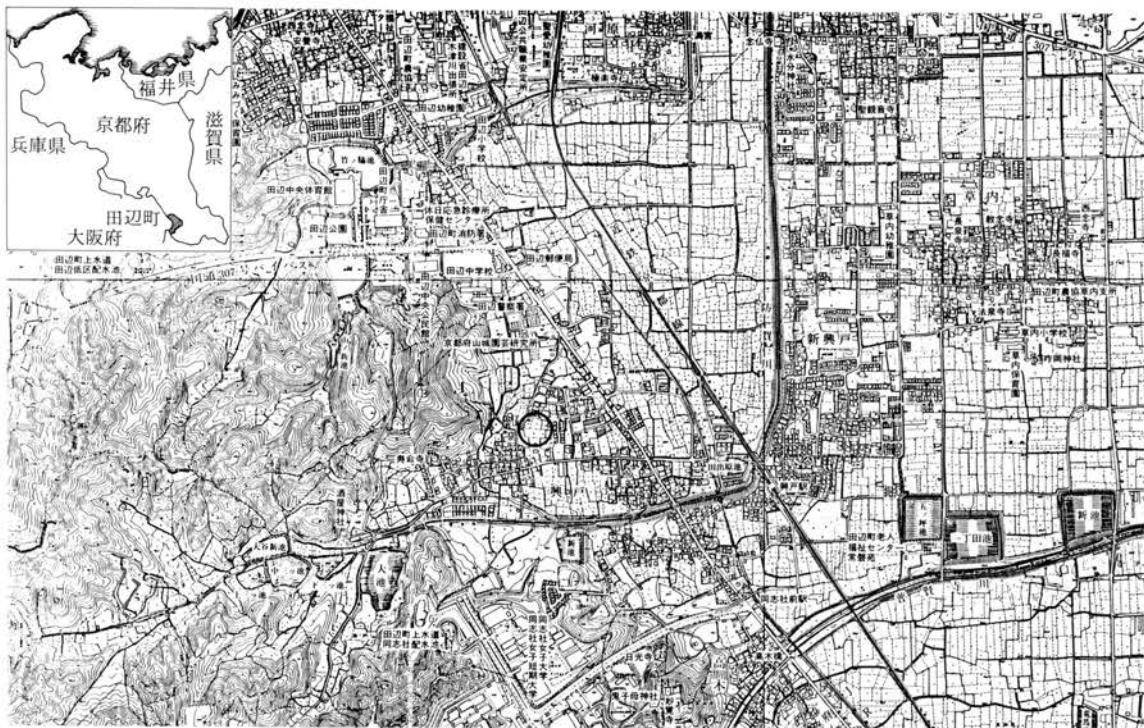
これまでに4回の発掘調査が行われ、弥生時代中期からほぼ中世にかけての各時代・各時期の遺構・遺物が発見されており、田辺町においても有数の遺跡とみられる。

近年この地域においても開発が進み、以前の田園地帯は刻一刻と変化している。

田辺町教育委員会では、昭和60年度より国庫補助金を受け主要な遺跡の範囲確認調査を行っており、昭和60年度・61年度の2ヶ年で国史跡大住車塚古墳（古墳時代中期・前方後方墳）に隣接する大住南塚古墳の確認発掘調査を行った。昭和62年度については、開発の進む町中央部に位置する遺跡群について確認調査をするため、補助金の交付を受けた。

調査は、興戸遺跡の南限推定地とされていた付近での遺構の有無、遺物の包含状況等について確認するため、田辺町大字興戸小字郡塚36番地・同38番地を調査地として行った。小字名が示すとおり、以前は周辺に郡塚古墳と呼ばれる塚があった地域でもある。

調査地を借用させてくださった北尾浩一・真敏氏、調査に参加された諸氏、ご指導・ご助言くださった皆さまなど多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



調査位置図 (S = 1 : 20,000)

2 位置と過去の調査

田辺町は、南山城平野のほぼ中央、伊賀山中に源を発する木津川の左岸に位置する。町の西部は大阪府と境し、生駒山系に連なる京阪奈丘陵地帯が広がり、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる南北に長い町である。

興戸遺跡は、田辺町のほぼ中央部、丘陵地帯から平野部に移る傾斜変換線の付近を中心に展開する遺跡である。

今回の調査地は、遺跡の南側を東流する防賀川の扇状地上に立地し、府道八幡木津線の西側、興戸集落の北側にあたり、第2次調査の行われた府立山城園芸研究所から南へ200mのところである。

ところで、興戸遺跡については、過去に4回の小規模な調査が行われている。

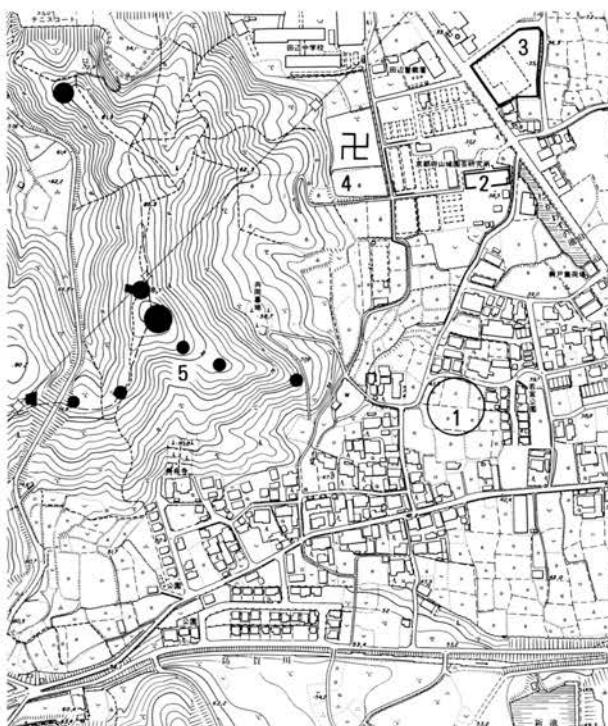
第1次調査は、昭和50年に田辺中学校地内で行われたもので、古墳の副葬品とも考えられる玉類や古式の須恵器が発見されている。

第2次調査は、昭和54年に府立山城園芸研究所内で行われたもので、弥生時代の溝、古墳時代後期の竪穴住居跡2基、奈良時代の掘立柱建物跡5棟・溝5条、平安時代の掘立柱建物跡1

棟などが、弥生時代中期中葉から後期前半、古墳時代後期、綠釉陶器を含む奈良・平安時代の土器類とともに発見された。ことに奈良時代の建物跡は、規格性をもつことなどから官衙的建物群ともみられ注目される。

第4次調査は、昭和62年に山城田辺郵便局新庁舎建設に伴い行われたもので、古墳時代前期の貯蔵穴様土坑2基が発見されている。

これらの調査や採集された土器類から、この遺跡は弥生時代中期から中世にかけての遺跡であることがわかっている。



周辺地形図 ($S = 1 : 7,500$)

1. 今回調査地 2. 昭和54年度調査地 3. 昭和62年度調査地
4. 興戸廃寺 5. 興戸古墳群

3 調査経過

調査は遺跡の範囲を確認すること、遺構の有無・遺物の包含状況を明らかにすることを目的として実施した。

トレーニング設定に際しては、町の地籍図作成のためのポイントを用いることができたので国土座標にあわせたトレーニングを設けることができた。36番地に東西方向の1・2トレーニング、38番地に南北方向の3トレーニングの合計3本のトレーニングを入れ調査を行った。調査面積は90m²である。

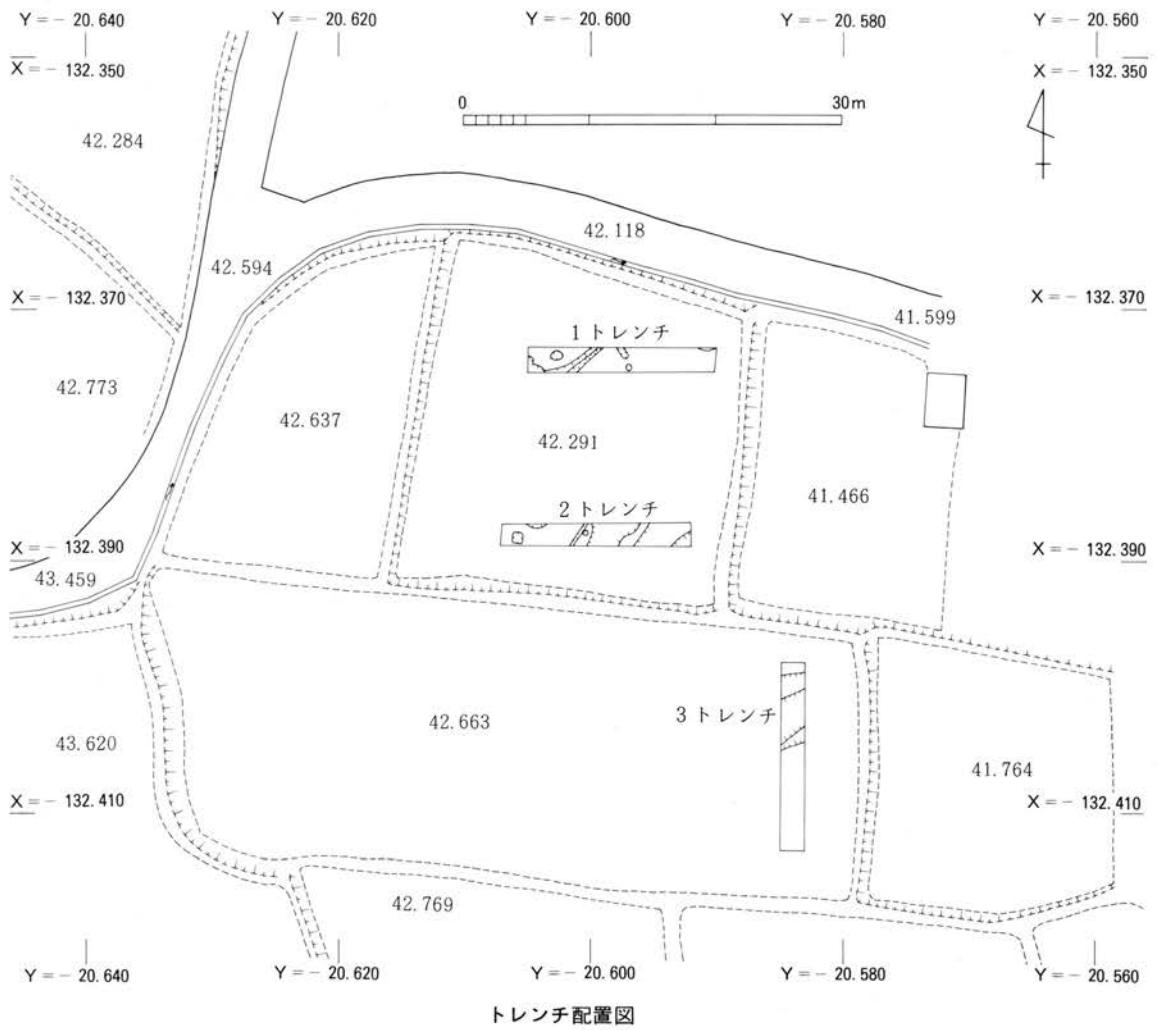
調査地が水田であり、現状復旧が必要なため、人力により調査を行った。

現地調査は昭和63年2月19日より着手し、1・2トレーニングより順次掘り下げを行い、後に3トレーニングの掘り下げを行った。3月10日に新聞記者等への発表、3月13日には現地説明会を開催した。その後、トレーニングの埋め戻しを行い、3月29日に作業を完了した。

基本的層位は、上から黒色土（耕作土）・灰色土・黄色系粘質土（床土）・灰褐色砂質土・褐色系砂質土（遺物包含層）・黄褐色系砂～砂質土（地山）の順である。地山面の標高は1トレーニング西端で41.8m、3トレーニング南端で41.9mを測り、西から東へ、南から北へと地山面は傾斜し下がっていく。



調査地近景（南西から）



トレンチ配置図

4 検出遺構

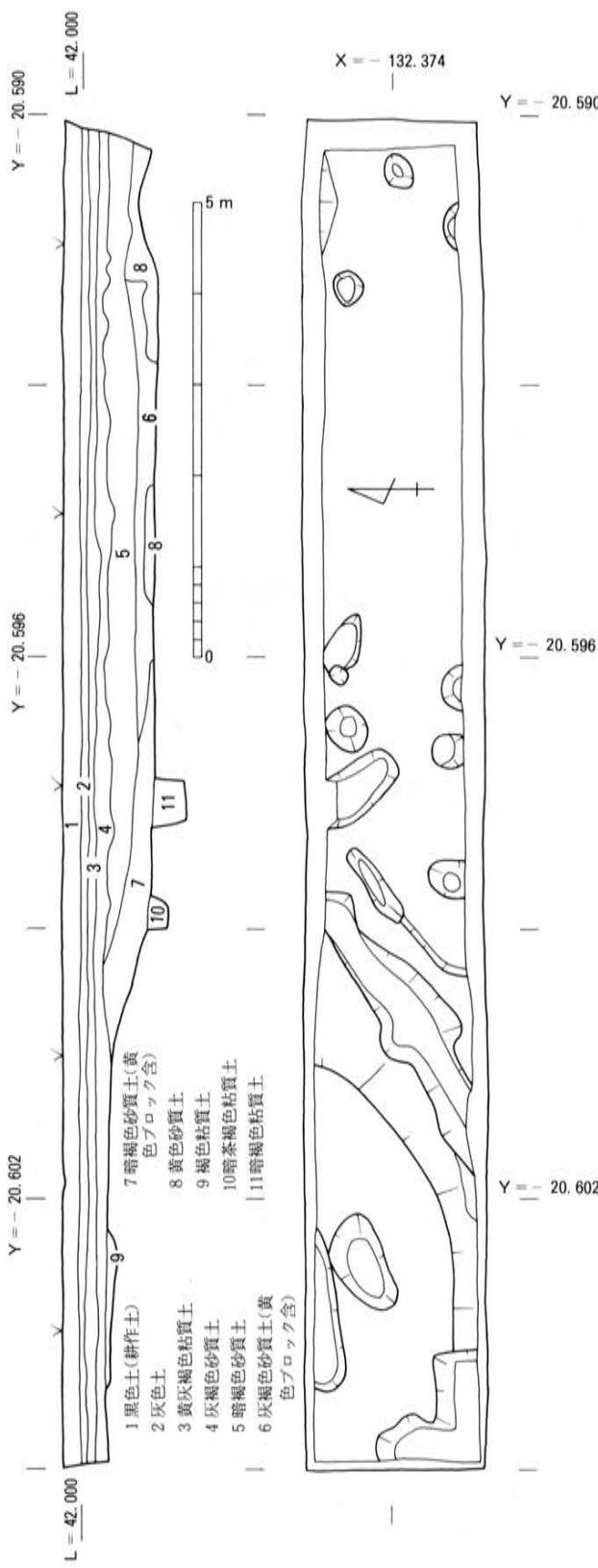
今回の調査で発見された遺構は、古墳時代の土壙・溝、平安時代の溝、その他時期不明の溝・ピットなどである。以下、古墳時代・平安時代の溝について簡単に説明する。

SD03 3 トレンチ北側で発見された東西の溝。幅約5m、深さ0.2~0.4mを測る。平安時代後半の土師皿の完形を含む多量の遺物が発見された。

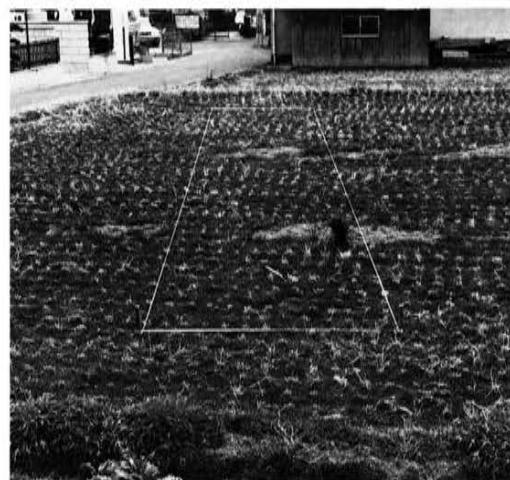
SD04 SD03の下層で発見された南西から北東方向の溝。古墳時代後半の土器、弥生土器等が発見された。



SD03土器出土状況（北から）



1 トレンチ実測図



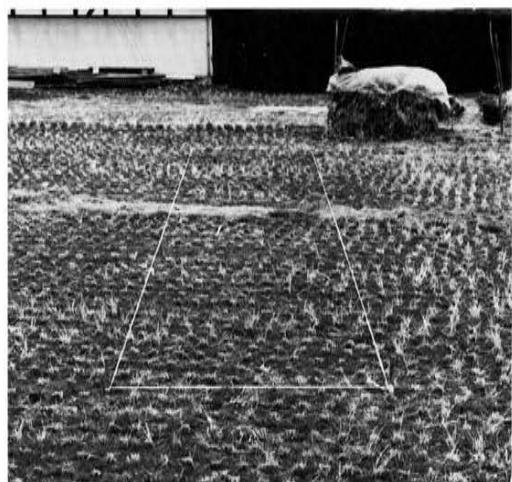
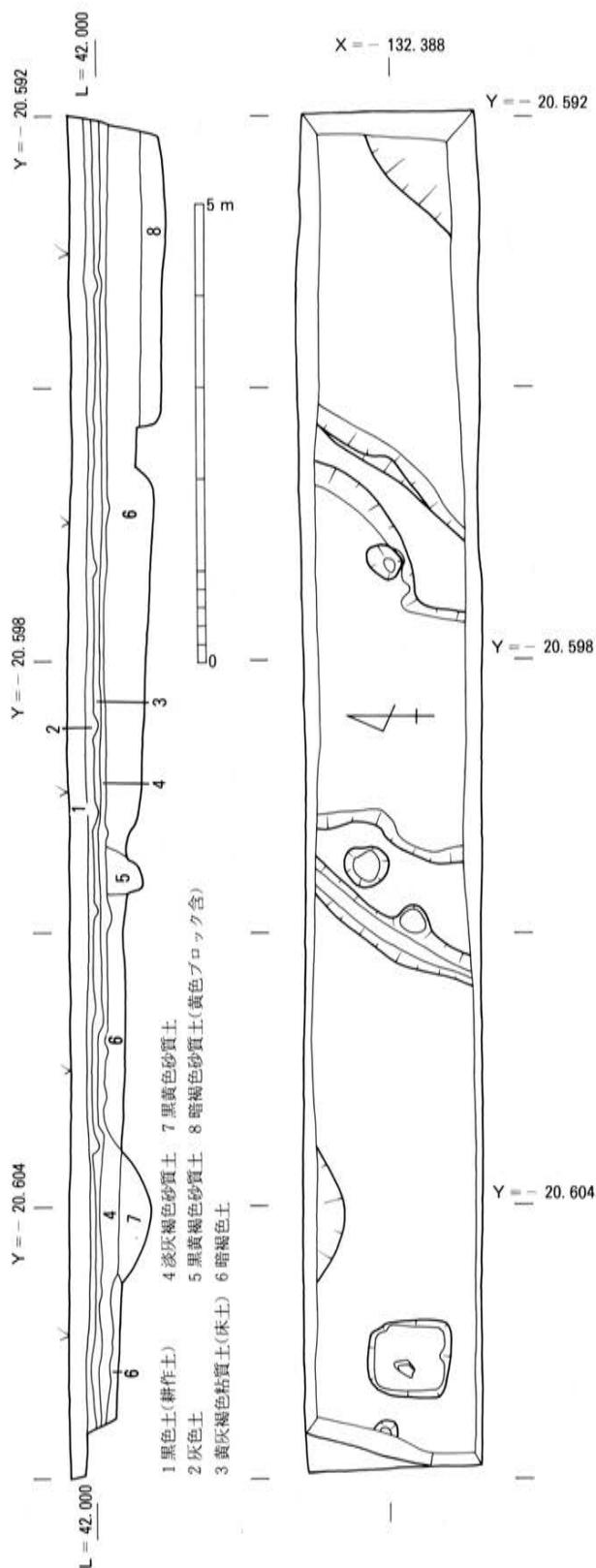
調査前（西から）

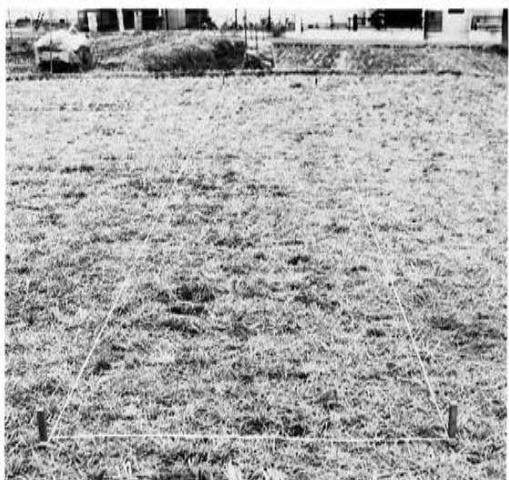
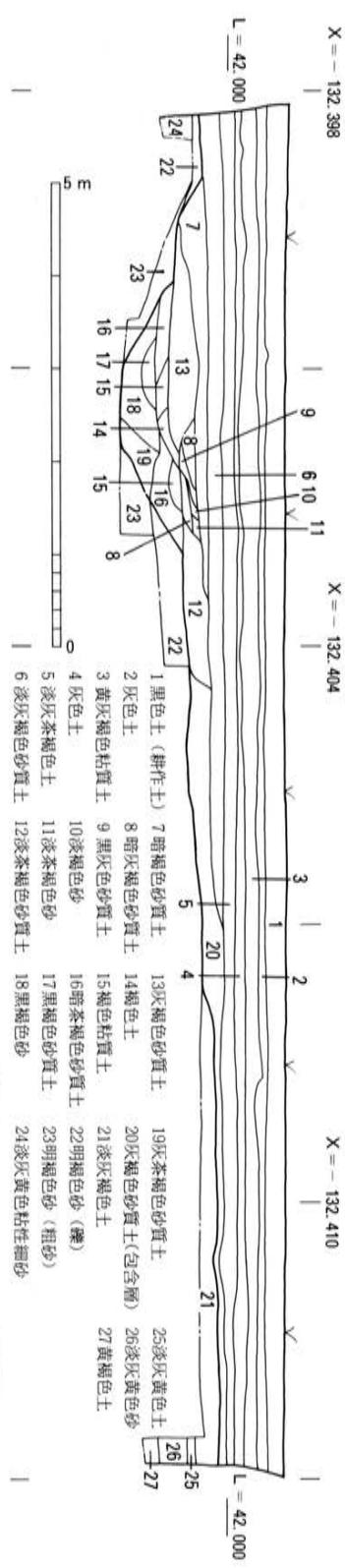
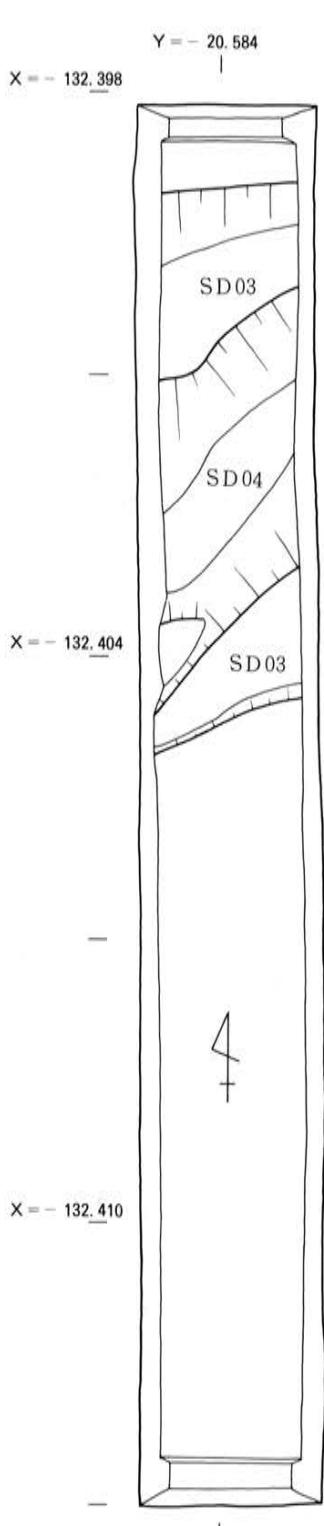


完掘状況（西から）



埋めもどし作業（西から）





調査前（南から）



SD 03・SD 04 完掘状況（北から）



埋めもどし作業（南から）

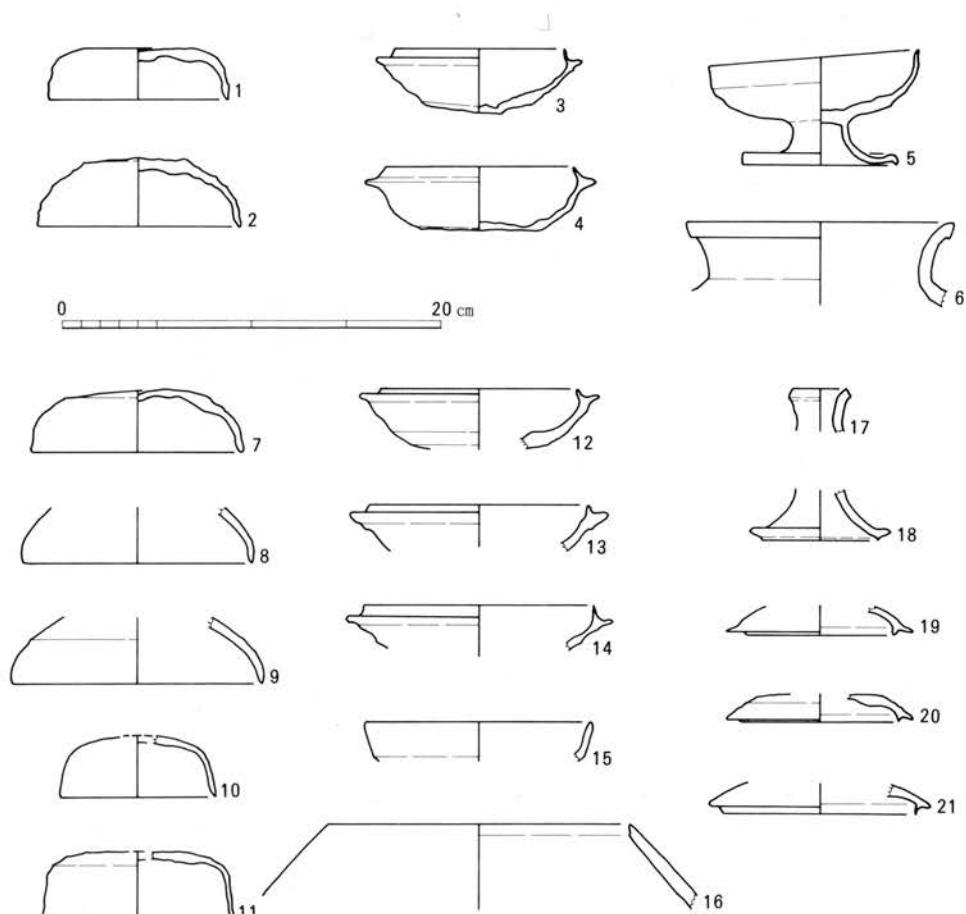
3 トレンチ実測図

5 出土遺物

各トレンチ包含層及び3トレンチSD03等から、多くの遺物が発見されており、量的には整理箱にして約10箱程ある。ここでは、1・2トレンチの包含層から発見された須恵器とSD03から発見された土器類について図示した。

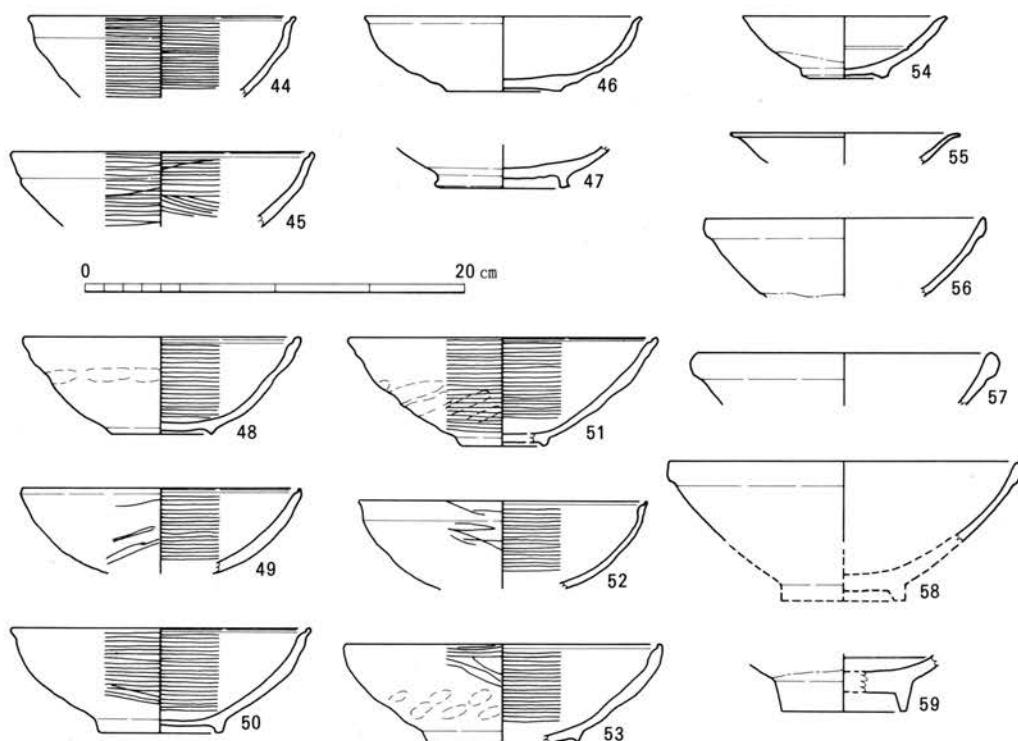
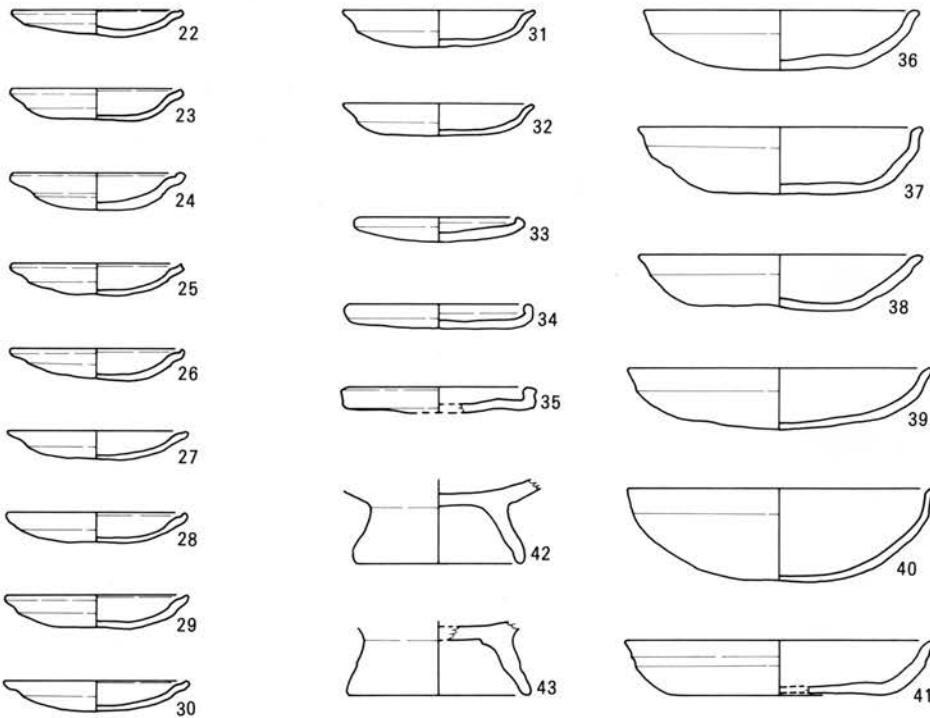
1・2トレンチ(1~21) 古墳時代的蓋杯等の最終段階のものやそれよりやや後の時代のものが大半を占める。2~5はほぼ完形近くで発見されたものである。

SD03(22~59) 土師器皿・黒色土器碗・瓦器碗・無釉陶器・白磁が発見された。土師器皿は口径9~10cmのものと14~16cmのものがあり、前者には「て」字口縁をとどめるものやコースター状のものがあり、後者には2段ナデを施すものがある。また台付のものもある。黒色土器は内外面とも黒色を呈する。無釉陶器は底部外面に糸切り痕がみられる。これらの土器類は概ね11世紀後半に属するものとみられる。



1・2トレンチ須恵器実測図

1トレンチ 1~6 2トレンチ 7~21



SD 03 土器実測図

土師器（皿：22～41、台付皿：42・43） 黒色土器（椀：44・45） 無釉陶器（椀：46・47）
瓦器（椀：48～53） 白磁（皿：54・55、椀：56～59）



1・2 トレンチ出土須恵器



S D 03 出土土器

6 ま と め

今回の調査は、興戸遺跡の南限推定地付近において行った小規模な確認調査であったが、予想をこえる多くの成果を得ることができた。以下時代別にまとめてみることとする。

弥生時代 3トレンチ S D04の底近くからは摩滅していない中期から後期の土器が発見されており、調査地の西側に集落等が存在したことが考えられる。

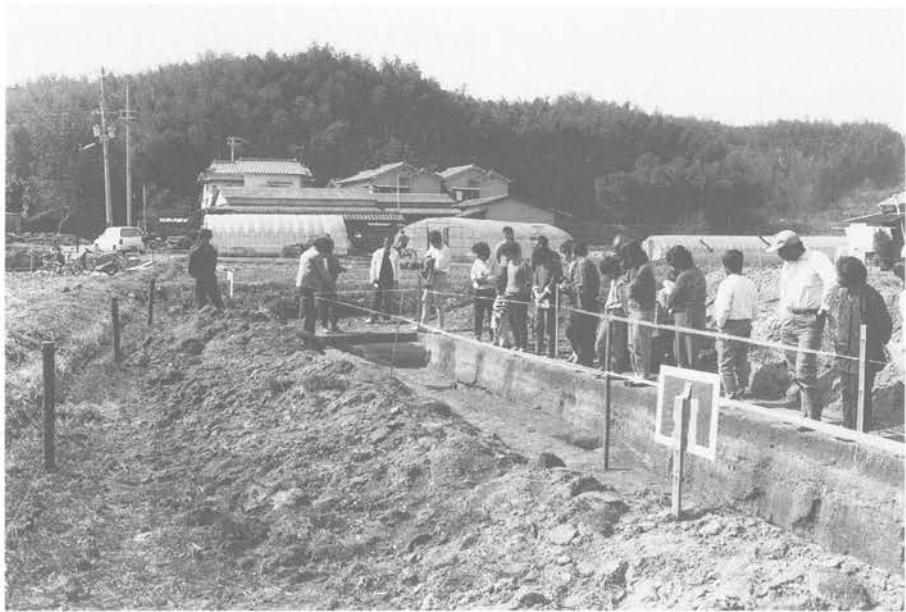
古墳時代 完形品を含む多くの土器が発見されたことから、ごく近くに集落等が存在したことが考えられる。S D04については調査範囲が狭く不明な点が多いが集落からの排水溝のようなものも推定できよう。また、地元の方々の話によると、1・2トレンチの東側に郡塚と呼ばれた塚がかつて存在したことがわかった。これが古墳なのかどうか、よくわからないが30年程前には、直径約3mの封土があったようである。

平安時代 3トレンチ S D03から発見された土器類は、11世紀後半のものとみられるが、当時としては輸入絶対量が少ない白磁が多く出土していることから、一般階級ではない、有力者の存在が推定され、S D03はその有力者の館ないし施設の一部とみることも可能となろう。また多数出土した土器類は、類例の少ない当該時期の良好な資料となろう。

以上のように考えられるが、周辺になお多くの遺構・遺物が存在しているということから、遺跡の範囲がさらに広がったこと、また、平安時代後半の館ないし施設（たとえば荘園体制の拠点的施設）が推定されることはある新たな発見であり、今後の調査が期待される。

参考文献

- 田辺郷土史会『田辺町郷土史 古代篇』田辺郷土史会 昭和34年
江谷寛・粟野謨『北鉢立遺跡』田辺町教育委員会 昭和50年
山口博・大槻真純「興戸遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-1 京都府教育委員会 昭和55年)
田辺町教育委員会『田辺町遺跡分布調査概報』(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第3集 田辺町教育委員会 昭和57年)
伊賀高弘「興戸遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和63年)



平成元年3月30日 印刷
平成元年3月31日 発行

**興戸遺跡発掘調査概報
—郡塚地区の調査—**

(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第10集)

編集・発行 田辺町教育委員会

〒610-03 京都府綴喜郡田辺町

大字田辺小字田辺80番地

電話 07746-2-9550

印 刷 明 新 印 刷 株 式 会 社

〒630 奈良市橋本町36番地

電話 0742-23-3131

(表紙 SD 03 土器出土状況)

(裏表紙 現地説明会風景)